

平安時代における自文化意識の形成

著者	坂口 健
内容記述	この博士論文は内容の要約のみ公表しています
発行年	2014
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2013
報告番号	12102甲第6764号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00123208

筑波大学博士（文学）学位請求論文 論文要旨

平安時代における自文化意識の形成

坂口 健

二〇一三年度

序章

本研究では、平安時代に文化を担った人々が何を自らの文化と規定したのかという文化意識を考察することにより、平安時代の文化形成の過程と原因、およびその文化の特徴を説明することを目的とする。

従来の研究では、平安時代の文化は「国風文化」とも呼称され、日本的な文化であるとされてきた。そこでは、しばしば「日本」や「日本人」といった概念はなかば自明のものとして扱われてきた。しかし、近年では、「日本」という概念それ自身が歴史的に形成されたものであると指摘されている。「国風文化」についても「日本的」や「日本的な文化」とは具体的に如何なる文化のことを意味するのかが問われている。

また、近年の「国風文化」研究においては、表象としての文化的諸作品だけを対象とするのではなく、平安時代の政治的・社会的な状況のなかで文化を歴史的に位置付ける研究がある。その方法論は継承する必要があるが、文化の歴史的な位置付けについては具体性を欠くなど再検討の必要がある。

これらを踏まえ、本研究では、以下の二点を課題とする。第一に、「日本的」な文化とは如何なる文化のことであるのかを、平安時代の文化に即して説明すること。第二に、対外関係をはじめとした九世紀の時代状況は、平安時代人のなかに如何なる自己認識や文化意識を育んだのか。そして、そのことが、九世紀後半以降にそれ以前とは様相の異なる文化が形成されるにあたって如何なる関連があったのかを詳らかにすること。本論文ではこの二点を課題として設定し考察することによって、平安時代の文化形成の過程と原因、およびその文化の性格を説明することを目指す。

こうした課題を解決するためには、従来の研究で用いられてきた「国風文化」の語を用いることについて再考が必要である。先行研究で指摘されているように、「国風文化」の語は、用いる人それぞれに異なるイメージが形成されてしまっており、「国風文化」の語を用いること自体が議論の妨げになりかねないからである。

そこで、本論文では、特定の文化を「日本的」な文化や自己の文化と認識して尊重しようとする意識が平安時代前期の史料上に言語化されていることに着目し、平安時代の人々が自分たちの文化だと考えたものを「自文化」、その自文化を尊重しようとする意識を「自文化意識」と呼称する。その自文化意識が如何にして形成され、如何なる特徴を持つていたのかを考察することにより、平安時代の文化へのアプローチを行う。

以上のような視角に基づき、具体的な考察対象としては、『靈異記』、「興福寺大法師等の長歌」、「古今集」、「日観集」といった九世紀から十世紀半ばにかけての文献史料を用いて、そこに外来文化と自文化とを対比して自文化を尊重しようとする意識を自覚的に提示した表現が見えることに着目する。そして、その表現を手掛かりとして、それぞれの場合における自文化への意識が如何なるものであるかを考察する。

第一章 自文化意識の萌芽

自文化意識が明確に言語化されて表現された最初の事例として、景戒『日本国現報善惡靈異記』（弘仁十三年、八二二頃成立。以下『靈異記』）がある。『靈異記』上巻序には、

昔、漢地造「冥報記」、大唐国作「般若驗記」。何唯慎「乎他国伝録」、弗「信」恐乎自土奇事^一。粵起自矚之、不^レ得「忍寢」。居心思之、不^レ能「默然」。故聊注「側聞」、号曰「日本国現報善惡靈異記」。

とある。世の人が中国で編纂された「他国の伝録」のみを尊重して「自土の奇事」を軽視していることを批判しており、「自土の奇事」を自文化として尊重する景戒の自文化意識が表れている。

景戒が如何にしてこのような自文化意識を形成し表現するに至ったのかは、彼の経歴や社会的な立場を考慮する必要がある。先行研究では、景戒は私度僧の出身であるとする見解がある。律令制のもとでは、僧侶でない人（俗人）が僧侶としての資格を得る沙弥・沙弥尼と呼ばれる段階に進むためには、国家の監督のもとで得度という儀式を受ける必要があった。しかし、僧侶になると免税特権が付与されたこともあり、国家の許可を得ずに得度する者もあった。許可を得ない得度を私度と呼び、私度によつて僧侶となつた者を私度僧と呼ぶ。景戒もそうした私度僧の一人であり、そのことが『靈異記』にも反映されているとする見解である。

景戒の体験・経歴を直接的に記した史料は、景戒自身の手になる『靈異記』下巻三十八縁のみである。それによれば、妻子とともに生活していた景戒は、延暦六年（七八七）九月四日夕方に、自身のこれまでの行いを反省して懺悔の心を発した。その夜、来訪した沙弥鏡日と会話をして懺悔するという夢を見る。翌朝この夢の意味を解釈して、「懺悔すれば出家する」と夢解きをする。ここに、景戒の出家に至る事情が記されている。景戒は延暦六年九月四日に自身の行いを反省して、出家を決定したのである。その際、その出家が官度であるか私度であるかは明示されていない。従来は、延暦六年の時点で景戒が妻子を持つているという記載から、正式な官度僧ならば妻子がいるはずがないとして、景戒は私度僧であると考えられてきた。しかし、景戒は延暦六年の時点では俗人であつたから、妻帯者であることと景戒が私度であることは関連させることはできない。「自土の奇事」の尊重の意識が、国家の支配に抵抗する私度僧としての立場から形成されたとする先行研究の見解には従いがたい。

むしろ、景戒は自身を「諾楽右京薬師寺沙門景戒」としており、官寺である薬師寺所属の僧侶であるとする。また、下巻三十八縁によれば、僧侶として伝灯住位の位を得たことを記しており、官僧としての昇進を喜ぶ姿勢が見られる。さらに、景戒がいう「自土」とは、『靈異記』説話では「日本国」や「本朝」とも呼称されており、天皇・朝廷により統治される政治的空間として認識されている。景戒の「自土の奇事」を尊重する意識は、国家権力に連なる存在としての自己規定に由来するといえる。しかし同時に、国家権力による仏教の規制や迫害に対しては厳しく批判していたり、善惡の判断が仏教的基準に拠つていたりして、景戒の判断基準は常に仏教が最優先であつた。つまり、「自土の奇事」を尊重する姿勢は、景戒自身が薬師寺に所属する官僧であるという立場から形成されたものであるといえる。

『靈異記』の因果応報説話においては、人間が善行・悪行をすると、神仏が褒賞・刑罰として報いが下されることにより、因果応報が成立する。これは逆にいえば、善惡の行為に対してそれぞれに応じた現報が現れるということが、神仏の实在の証でもあつたのではないかと考えることができる。収集した多くの「自土」の説話に時・場・人を問わず普遍

的に因果応報が見られるということは、「自土」たる日本に確かに神仏が存在することを証明することとなる。それ故、日本で僧侶として活動する景戒にとっては、インドや中国だけでなく日本も仏国土であることを証明する「自土の奇事」が尊重すべき重要な存在となつたのである。

第二章 自文化意識の表出

第一章で指摘した通り、景戒は延暦六年（七八七）に出家を決意した。その直後に『靈異記』の編纂に着手するとは考えがたい。編纂に着手したのは、僧侶として経験を積んだ八世紀末から九世紀初頭頃と推定できる。この時期には、空海や最澄が中国から最新の仏教と多数の經典とを将来して台頭したうえ、仏教統制の政策が実行されるなど、景戒の所属する薬師寺はその存在感を相対的に減少させていた。

『靈異記』下巻三十九縁末尾には、時の天皇である嵯峨天皇について、聖君であるか否かの議論を載せる。嵯峨は狩獵をしていて慈悲心がないとする批判に対して、景戒は、国内の物は天皇が自由にする権利があるとして嵯峨を擁護している。これは、景戒が嵯峨の聖君性を擁護しているようではあるが、慈悲心の有無という批判に対して権利の有無として反論するのは、有効な反論に成り得ていない。しかも、上巻序では慈悲心があることを根拠として仁徳天皇が優れた天皇であるとしており、下巻三十九縁での擁護と整合しない。このことから、景戒は嵯峨に対して本心では批判的であつたのではないかと思われる。その背景には、下巻三十九縁でいう嵯峨の慈悲心の欠如とともに、仏教統制や最澄の登用など景戒の所属する薬師寺にとって不利な政策を取つたこともあつたと考えられる。

また、嵯峨朝や淳和朝においては、「文章経国思想」のもとで漢詩の詠作が国家経営に直結するとして重視され、勅撰漢詩集『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』の編纂がなされた。これらの漢詩集においては、『靈異記』と異なり、日本の詩を重視する姿勢は言語化されていない。中国とは異なる日本のあり方への視線は見られず、日本の詩を尊重しようとする意識は未成熟である。

ただし、『経国集』序には「伝聞不_レ如_二親見_一、論_レ古未_レ若_レ徴_レ今」との表現もあり、伝聞の「古」の詩よりも「親見」できる「今」の詩を重視する意識がある。ここに、遠いものだけではなく近いものを尊重しようとする自文化意識へ繋がり得る端緒も存在している。また、嵯峨朝には日本の歴史への高まりを背景として、『日本書紀』の講読が行われた。これも、『靈異記』ほど明確に自文化意識を言語化してはいないが、それに繋がる端緒である。『靈異記』の自文化意識は先んじて形成された意識であるが、異端的なものではなく、桓武・嵯峨朝における政治的・文化的な時代状況のもとで形成されたものであつた。

第三章 自文化意識の自覚化

『続日本後紀』嘉祥二年（八四九）三月庚辰（二十六日）条には、この日、興福寺の僧侶が仁明天皇の四十歳を祝賀して種々の奉獻を行ったことが記される。その奉獻物のひとつには、仁明の四十歳を祝賀して更なる長寿を祈願する長歌がある。この長歌は、自文化意識を明確に言語化したものとして、『靈異記』に次ぐ時期の成立であり、自文化意識の形

成を考えるうえで重要である。本長歌の一節には、

大御世^乎、万代祈利、仏^{尔毛}、神^{尔毛}、申上^流、事之詞^波、此国^乃、本詞^尔、逐倚^天、唐^乃、詞
平不^レ飯^{良須}、書記須、博士不^レ雇^須。此国^乃、云^伝布^{良久}、日本^乃、倭之国^波、言玉^乃、幸国^度
曾、古語^尔、流来^{礼留}。神語^尔、伝来^{礼留}。伝来、事任^{万尔}、本世^乃、事尋者、歌語^尔、詠反^志
天、神事^尔、用来^利。皇事^尔、用来^利。本乃^{世尔}、依遵^豆、仏^{尔毛}、神^{尔毛}、拳陳^天、禱^{里志}誠^波、
丁寧^度、聞許^志食^{豆牟}。

とある。ここに、仁明天皇を祝賀するにあたって「唐の詞」ではなく「此の国の本つ詞」を用いたことが強調されており、「此の国の本つ詞」を自文化として尊重する意識が見える。本長歌は興福寺僧による詠作である。自文化意識を表現した『靈異記』と本長歌がいずれも貴族ではなく南都僧による作品であることは、僧侶、特に南都僧に自文化意識を形成しやすい土壌があったことを物語る。

すなわち、第一に、僧侶は日常的に仏典など漢籍に接し、それを訓読していた。それ故、漢語を訓読するなかで、漢語の外来性をより強く意識し、他国語たる漢語とは異なる存在としての自国語である「此の国の本つ詞」を尊重しようとする意識へと繋がった。外来文化に接するからこそ、それに対する自文化の存在を否応なく意識し、それを尊重しようとする意識も生まれるのである。僧侶が訓読の主たる担い手であり外来文化と接触する機会が多かったことが、僧侶に自文化への意識を獲得させるに至り、「此の国の本つ詞」や「自土の奇事」のような自文化を尊重しようとする姿勢がまず僧侶から生まれ出た。

第二に、仏教ではあらゆる言語に貴賤を設けないとする思想があった。このことは、「阿毘曇毘婆沙論」などの漢訳仏教經典に見られ、日本でも九世紀初頭成立の「東大寺諷誦文稿」に見える。この立場からであれば、漢文も和文も仏の説法を表記する言語として同価値である。つまり、仏教の立場からであれば、漢文をはじめとする中国文化の権威や規範性は絶対的なものではなく、相対化することができる。したがって、先進的で規範的な中国文化、ないしはそこから日本に伝来した文化を相対化し、自文化に価値を認めて尊重する姿勢は、僧侶による仏教の立場からであれば比較的生まれやすいといえる。はじめに僧侶の立場から自文化の尊重の姿勢が表れたのには、僧侶は外来文化に接しやすい環境にあることと共に、仏教の思想が外来文化の相対化を容易にしたという理由があった。

第三に、僧侶のなかでも特に南都寺院は九世紀前半に勢力を減退させており、その勢力の回復を企図していた。「此の国の本つ詞」を尊重する理由は、長歌によれば、天皇の長命祈願は日本では古くから「此の国の本つ詞」によって行われていたからである。古来の伝統を殊更に強調して「此の国の本つ詞」を重視する背景には、その古来の伝統を担って神仏に祈願してきたのが、ほかならぬ興福寺であるという自負が看取できる。そして、仁明天皇の四十歳を祝賀する算賀という儀礼の場において、興福寺が古くから天皇に奉仕してきた方法である「此の国の本つ詞」を強調することによって、天皇と興福寺との人間関係を再確認する意図があったと考えることができる。

興福寺僧が「此の国の本つ詞」を尊重する自文化意識を強く認識して言語化した要因は、以上の三点に見出すことができる。

さらに、本長歌は国家側にも高く評価され、『続日本後紀』に全文が採録された。しかもその際には、「夫倭歌之体、比興為^レ先。感^二動人情^一、最在^レ兹矣。季世陵遲、斯道已墜。

今至^二僧中^一、頗存^二古語^一。可^レ謂^三礼失則求^二之於野^一。故採而載^レ之^一」としている。和歌が衰退している状況にあつて、僧中に「古語」として存在していたことを礼に譬えている。つまり、興福寺僧が「此の国の本つ詞」によつて詠んだことを強調したことを受けて、国家側も本長歌が和歌であることに意義を見出し、孔子の教えにも譬えられるほどの価値ある存在と位置付けている。このことは、僧侶によつて形成・表現された自文化意識が宮廷社会にも受容され、さらに国史である『続日本後紀』を通じて拡散されたという自文化意識の形成過程を物語る。

第四章 自文化意識の継承

宮廷社会に受容された自文化意識は、変化を伴いながら宮廷社会に継承され定着していく。従来の研究では、九世紀後半以降の文化について、排外意識を前提としているとする見解がある。確かに、九世紀日本の対外関係は新羅とは度々摩擦を起こした。しかし、それは日本が新羅を朝貢国と位置付けたことに新羅側が反発して、日羅間の外交姿勢の対立が惹起されたことに起因する。新羅とは異なり、日本側の外交姿勢を受け入れて朝貢国としての姿勢を取った渤海に対しては、日本側も厚遇している。また、貿易規制を敷いていた唐の衰退を背景として海商の来航は次第に増加しており、渤海使や海商がもたらす文物は珍重されていた。したがって、九世紀の日本の日本の対外関係を総体として考えると、一概に外来文化を拒否する排外意識が存在していたとは考えがたい。自文化意識も、排外意識を前提として形成されたと考えることはできない。むしろ、『靈異記』や後述の『日観集』に見られるように、外来文化の価値を認めたくえで、それだけではなく自文化も尊重すべきであるとするのが、平安時代前期の自文化意識の特徴である。

九世紀末以降においては、それ以前には僧侶が表現していた自文化意識が、貴族の手によつて表現され始める。『古今和歌集』真名序（延喜五年、九〇五成立）においては、

自^三大津皇子之初作^二詩賦^一、詞人才子、慕^レ風繼^レ塵、移^二彼漢家之字^一、化^二我日域之俗^一。民業一改、和歌漸衰。

とある。詩が盛んになったことによつて歌が衰退したとする認識が示されている。ここに、詩を「漢家」からの外来文化とし、歌を「日域」の自文化とする意識が見える。そのうえで、『古今和歌集』は歌集として歌に価値を見出して編纂されている。

それが、『日観集』序（天曆年間、九四五頃成立）においては、

夫貴^レ遠賤^レ近、是俗人之常情、閉^レ聰掩^レ明、非^二賢哲之雅操^一。望^二青山^一而対^二白浪^一、何異^二風流^一。聞^二糸竹^一以賞^二煙霞^一、既同^二声色^一。我朝遥尋^二漢家之謡詠^一、不^レ事^二日域之文章^一。草藁滋生、塵埃空積。寔可^二重心咨歎^一者也。

とある。世の人が「漢家之謡詠」ばかりを尊重して「日域之文章」を顧みていないことを嘆かましいことであるとしている。ここでは、詩を「漢家」のものと「日域」のものに区分して、「日域」の詩も尊重すべきであるという。『古今和歌集』においては歌が自文化、詩が外来文化として位置付けられていたのが、『日観集』においては詩が「日域之文章」は自文化、「漢家之謡詠」は外来文化として位置付けられている。ここに、何をもつて自文化と規定するかが、詩や歌といった形式に拠るのではなく、それぞれの場合によつて多様であることが明瞭に表れている。

『日観集』序において、中国とは異なる日本の詩を尊重する自文化意識をもたらした要因は、『日観集』の撰者・序作者である大江維時が詩才・学才によって政治的地位を確立した文人官僚であったことにある。「日域の文章」が顧みられていないということは、日本の文人官僚である維時にとっては、学才・詩才をもって政治的・社会的地位を確立している自分たち文人官僚の存在意義が揺るがされているということである。そこで、自己の存在意義を維持するために、日本で詠まれた詩が中国の詩に劣らないものであることを主張する必要性があったのである。

終章

本論文による考察の結果、自文化意識が形成され展開していく過程を解明することができた。すなわち、自文化意識は、はじめは九世紀前半の『靈異記』に代表されるような僧侶の意識として形成された。だが、その意識は僧侶だけに留まらず、九世紀半ばの興福寺大法師等の長歌によって宮廷社会に対しても提示された。九世紀半ばまでの宮廷社会においては自文化意識の形成や表現は未熟であったものの、その萌芽は存在していたことで、興福寺僧の提示した自文化意識を受容し、さらに『続後紀』に掲載することでその意識を拡散していった。その結果、九世紀末以降には宮廷社会においても貴族によって『古今集』や『日観集』にみられるような自文化意識が表現された。

こうして表現された自文化意識は、それぞれの作者の置かれた環境に応じて、具体的な形としては異なる表れ方を見せている。しかし、本論文で考察した自文化意識を、全体として通して見ると、いくつかの共通点を指摘することができる。

第一に、自文化意識は、政治的な空間である「日本国」を前提として形成されたことである。自文化意識を表明するとき、自文化は常に外来文化との対句表現によって言語化される。そこでは、自文化は「自土」「此の国」「日域」のものとして表現される。これらの語は、政治的空間としての「日本国」を前提としている。自文化は、単に地理的な空間としての日本列島に存在する文化としてではなく、天皇の徳化の対象となるような政治的な空間として形成された国家に存在する文化として意識されている。

第二に、自文化意識は、外来文化の興隆によって自文化が衰退しているという現状認識に基づいている。逆に、勅撰三漢詩集における詩のように、対象が現に興隆していると認識される場合には、詩を自文化と位置付けることは行われておらず、自文化意識は未成熟である。これに対して、自文化を尊重すべきことを明瞭に主張する『靈異記』、「興福寺大法師等の長歌」、「古今集」、「日観集」においては、外来文化の興隆によって自文化が衰退していると認識し、その認識が自文化を尊重すべきであるという主張をするに至る原動力となっている。しかも、このように外来文化と対置しつつ自文化を尊重しようとする際には、少なくとも本論文で考察した十世紀半ばまでの史料においては、自文化を衰退せしめた外来文化を否定する意識は表れない。

第三に、それぞれの場合において自文化とされた対象は、作者・編者にとって、自身の存在意義に直結するものである。景戒にとって「自土の奇事」とは日本が仏国土であることの証であり、彼が日本で僧侶として布教活動をする正当性を担保するものであった。興福寺僧にとって、「此の国の本つ詞」は、古来、興福寺が神仏祈願により天皇に奉仕してき

た方法であった。したがって、興福寺が天皇との関係によって社会に地位を占めるために、「此の国の本つ詞」は重要な存在でもあった。『古今集』の撰者・序作者たる紀淑望や紀貫之らにとって、歌は自身が宮廷社会で歌人として存在する意義や価値の源泉である。歌は、淑望にとって「吾が道」として彼の存在意義を支えるものであった。同様に、『日観集』の撰者・序作者たる大江維時にとって、「日域の文章」は自身が宮廷社会で詩人・文人貴族として存在する意義や価値の源泉である。したがって、彼らが歌や「日域の文章」を自文化として尊重しようとすることは、彼ら自身の宮廷社会における存在意義を維持・確保する行為である。

したがって、自文化を尊重する意識とは、平安時代の日本という国家のなかで特定の地位を得ている者が、その地位を可能ならしめているものの国内的な価値が中国からの異文化の流入によって減衰して、日本の国家内での自己の存在意義が危機にあることを実感したときに、その存在意義を取り戻そうとして形成・表明された意識だということができる。こうした自文化意識を思想的前提として成立したのが、平安時代前期の文化であった。

したがって、こうした自文化意識は、外来文化に対して「日本人」としての対抗意識から形成・表現されたものではない。だからこそ、それぞれの自文化意識の表明された史料においても、外来文化を否定する意識は存しない。むしろ、多くの場合、自文化と外来文化は本質的に共通であるとする論理によって、外来文化は自文化を価値付けるために用いられている。外来文化は規範として尊重されるのである。自己を「日本人」として規定する立場から外来文化に対抗しようとするような排外的な意識は存在しなかった。

これを踏まえ、序章で提示した二つの課題への回答を次のように示すことができる。

第一の課題である「日本的」な文化とは何なるものであるかについて、平安時代にも自文化意識という形で、自文化を「日本的」と捉えて尊重する考え方が存在した。具体的に何を「日本的」な文化とするかは場合により様々であったが、そこで「日本的」とされたものが、国家のなかで作者自身の存在や地位を保証するものである点は共通している。同時に、作者が自文化を「日本的」と規定することは、作者と読者が価値観を共有するための紐帯ともなった。

第二の課題である九世紀の時代状況と文化意識や文化形成との関連については、自文化の衰退や存在意義の危機を惹起した点で、九世紀の対外交流の増加が自文化意識形成の直接的な契機であったことが指摘できる。しかし、中国は規範であり続け、外来文化を排斥する意識は存在しなかった。また、九世紀までには日本国の枠組みが確立していたことも、重要な社会的要因として挙げられる。「日本国」という国家の枠組みが、そこに暮らす僧侶や貴族の存在を規定するような強い規制力として機能したために、知識人層にとっては、国家のなかで自己の立場を維持することが重要事であり、国家を離れたところに自己の存在意義を見出すことはできなかった。それ故、外来文化の影響でその枠組みの内部における自己の存在意義が脅威に晒された時、自文化意識が明確に表現されたのである。

したがって、自文化意識の萌芽である『靈異記』が九世紀初頭に現れて以降、次第に自文化意識が言語化されていくのは、九世紀初頭までには日本という国家の枠組みが僧侶や貴族といった知識人層に浸透しており、かつ自文化意識を惹起させるような外来文化の興隆が起こった時期がほかならぬ九世紀であったからだといえることができる。

本論文では、以上のような時代状況と自文化意識との関わりを、『靈異記』をはじめとす

る個々の具体的な史料の解釈を通じて説明できた。「国風文化」の要因を対外交流の途絶や排外意識に求めていた先行研究の見解を史料に即した形で修正し、時代状況と文化との関連についての議論を進展させることができた。

最後に、「国風文化」論に対して、自文化意識という概念を用いることの有効性を改めて確認しておきたい。本論文では、自文化意識の語を用いることにより、文化形成の要因を社会状況の観点から考察した従来の「国風文化」論とは違って、文化の直接的な担い手たるそれぞれの作者・編者が如何なる意欲をもってそれぞれの作品をつくりあげたのかという、作者・編者の内面からのアプローチをとった。これにより、「日本的」な文化を尊重するあり方が多様性と共通性をもって存在していたことが明らかに、それぞれの場合における意識の具体相を説明するとともに、それぞれの意識を全体として自文化意識という共通の論理によって見通すことが可能となった。ここに、本論文で用いた自文化意識という概念や方法論の有効性がある。